

## 「東洋大学の創立者 井上円了の人と思想」

東洋大学学長 竹村牧男

## ① 創立者・井上円了 略年譜

- 安政 5年(1858) 2月4日(新暦3月18日)、越後国大谷派慈光寺の長男として誕生
- 明治 4年(1871) 東本願寺にて得度
- 明治 10年(1877) 京都東本願寺の教師教校に入学
- 明治 11年(1878) 4月東本願寺留学生として上京 9月東京大学予備門に入学
- 明治 14年(1881) 9月東京大学文学部哲学科に入学
- 明治 18年(1885) 7月東京大学文学部哲学科を卒業
- 明治 20年(1887) 9月哲学館を創立 麟祥院で開校式を挙
- 明治 21年(1888) 政教社が雑誌『日本人』を創刊 同社の創設に参加、6月欧米視察
- 明治 22年(1889) 郷里の父からの帰郷の要望に対し、仏教の危機存亡の重大時局につき帰郷不能の手紙を出す
- 明治 23年(1890) 哲学館専門科設立のため全国巡講を開始(26年まで継続)
- 明治 26年(1893) 迷信打破のため妖怪研究会を設立
- 明治 29年(1896) 東洋大学設立と東洋図書館建設の旨趣を発表  
第2回全国巡講開始(35年まで)  
6月『仏教哲学系統論』により文学博士の学位を受ける
- 明治 30年(1897) 哲学館 現在の白山校地に移転
- 明治 35年(1902) 哲学館大学部開設を予告  
11月欧米およびインドの教育事情視察のため外遊  
12月哲学館事件発生
- 明治 36年(1903) 修身教会設立趣意書を全国に配布 『広く同窓諸子に告ぐ』を発表
- 明治 37年(1904) 4月哲学館大学開校式を挙 哲学館大学長に就任  
哲学堂落成式を挙 四聖を祀る
- 明治 39年(1906) 大学長を辞し名誉学長となる 哲学堂に退隠  
4月修身教会運動のため大正8年まで全国を巡講  
6月哲学館大学を私立東洋大学と改称
- 明治 44年(1911) オーストラリア、南アフリカ、北欧、南欧、南米等の視察
- 大正 2年(1913) 哲学堂の講堂落成
- 大正 6年(1917) 東洋大学創立30周年記念式典 記念講演
- 大正 8年(1919) 6月大連で逝去

②井上円了の著作

『真理金針』『仏教活論序論』『仏教活論本論』『活仏教』  
『哲学一夕話』『哲学要領』（前・後）『純正哲学講義』『哲学早わかり』『哲学新案』  
『仏教通観』『仏教大意』『大乘哲学』『仏教哲学』  
『日本仏教』『真宗哲学序論』『禅宗哲学序論』  
『外道哲学』『インド哲学綱要』  
『宗教新論』『比較宗教学』『宗教学講義』『宗教哲学』  
『倫理通要』『倫理摘要』『日本倫理学私案』  
『通信教授 心理学』『心理摘要』『東洋心理学』『仏教心理学』『心理療法』  
『教育総論』『教育宗教関係論』  
『妖怪学講義』『妖怪玄談』『星界想遊記』  
『欧州政教日記』『南船北馬集』  
『円了茶話』『甫水論集』『円了講話集』『奮闘哲学』

※『井上円了選集』全25巻（学校法人東洋大学）

③「已に哲学界内に真理の明月を発見して、更に顧みて他の旧来の諸教を見るに、耶蘇教の真理にあらざることいよいよ明らかにして、儒教の真理にあらざることまた容易く証することを得たり。独り、仏教に至ては、その説、大いに哲理に合するを見る。余、是に於て再び仏典を閲し、ますますその説の真なるを知り、手を拍して喝采して曰く、何ぞ知らん、欧州数千年来、実究して得たる所の真理、早く已に東洋三千年前の太古にありて備わるを。而して余が幼時、その門にありて真理のその教中に存するを知らざりしは、当時余が学識に乏しくして、これを発見するの力なきによる。是に於て余は始めて新たに一宗教を起すの宿志を断ちて、仏教を改良して、之を開明、世界の宗教となさんと決定するに至る。是れ実に明治十八年の事なり。これを余が仏教改良の紀年とす。」（『仏教活論序論』）

④「……しかして諸種の学問中、最もその高等に位するものはすなわちこれ哲学にして、よくこれを研修するにあらずんば、もって高等の知力を発達し、高等の開明に進向するあたわず。これまた当然の理なりとす。哲学の必要たる、ここにおいてか知るべきなり。それ哲学は百般事物につきて、その原理を探りその原則を定むるの学問にして、上は政治法律より下はもって百科の理学工芸におよび、みなその原理原則を斯学に資取せざるはなし。すなわち、哲学は学問世界の中央政府にして万学を統轄するの学と称するも、決して過褒の言にあらざるなり。……」（「哲学館開設の旨趣」、明治20年6月）

⑤「哲学は大工の尺度（ものさし）の如くとでも申しませうか。大工の木を削るは尺度では削りません、けれども尺度は無用にして益がないかと云ふに、決して無用ではない。成程木を削り物を取り扱ふには格別尺度でなくても取扱ふことが出来る

か知りませんが、仕事が込み入ってくれば尺度が必要となるに違ひない。哲学は実際に在て直ちに世間を支配するものでもなく、機械を拵へるものでもないが、世間人事の尺度となるは哲学に違ひない。故に直接に事に当らんでも無用と云ふことは出来ません。……」（麟祥院での開校式での演説、明治20年9月16日）

⑥「而して此学の効用は一方より簡単にいへば思想練磨の術として必要なる学問なりといふことを得べし。そもそも人は肉体と精神との二部より成るものにして、その肉体練磨の術としては運動あり体操ありて以てその健康を保持するに足る。而して此外になほ精神練磨の法ありて之か強健を致すのすべなかるべからず。……そも人の思想なるものは決して徒らにその発達を致すものにあらず、身体の強壯におけると同様に必ずや之を教練する所以の法術あり。……

而かも余が哲学を以て如何なる人にも之を研究するを要すといふ所以は、唯思想練磨としての要あるを以ての故なり。」（『哲学の効用』『天則』、明治24年7月）

⑦「第一に知力を練磨すること、第二に思想を遠大にすること、第三に情操を高尚にすること、第四に人心を安定すること」（『哲学早わかり』）

⑧例えによりて哲学の 効能書きを掲げんに 霧海における羅針盤 暗夜を照らす常夜灯

もしも哲学なかりせば 多くの人は迷信の 雲に迷うて生涯を 暗夜のうちに 終わるべし（『哲学和讃』『奮闘哲学』12～13）

⑨哲学界の歴史とは 唯物唯心の争いと 一元多元の戦いの跡をとどむる古戦場  
一元論の火の前に 長き世を経てかたまりし 唯物唯心の争いの 氷もとけて 水となる

物と心の関係は 離れて離れぬ絶妙の 不一不二とぞ定むるは 一元論の極致なる

この一元の本体は、不可思議中の不可思議なり 心もことばも及ばねば 絶対無限と名づけたり

宇宙の森羅万象は その絶対の波にして 時方二系の際なきは その発したる 光輝なり（同前、26～30）

⑩「およそ哲学上論ずるところの問題はこれを帰するに、心のなんたる、物のなんたる、世界のなんたるに外ならず。世界は物のみにして心なしと立つるもの、これを唯物論といい、世界は心の中にありてその外に物なしと立つるもの、是を唯心論という。唯心は心の一方に僻し、唯物は物の一方に僻し、共に中正の論にあらざること明らかなり。もしその中正を立てんと欲せば、物心二者を統合して、非物非心の理を本とせざるべからず。その理の外に物心なしと立つるときはこれを唯理論という。唯理論は理の一方に偏するをもって、これまた中正の論にあらず。その理を

離れて別に物心ありとするも、また正論にあらず。故に理は物心を含有し、物心は理を具備し、二者その別あるも相離るるにあらず、相離れざるもその別なきにあらず、これを哲理の中道とす。」(『哲学一夕話』第一編)

⑪「故に物心の本体を定むるには、まず非物非心の理体を立つるより外なし。その理体、これを「真如」という。真如は物にして物にあらず、心にして心にあらず、いわゆる非物非心にして、またよく是物是心なり。これを非有非空亦有亦空の「中道」と言う。故に余は、ここに唯理論の名を用うるも、その説敢えて理の一辺に偏するものを云うにあらず、理と物心と相合して不一不二の関係を有するものを言うなり。これ余があるいはこれを名づけて、中理論、または完理論と称する所以なり。」(『仏教活論序論』)

⑫「唯物論(多元論) → 唯心論(一元論) → 完理論(中理論)」  
「諸法実在論(『俱舍論』の五位七十五法の法多元論) → 唯識説 → 真如(『大乘起信論』の真如門と生滅門の不一不二等)」

虚怪	偽怪(人為的妖怪)
⑬ 妖怪	誤怪(偶然的妖怪)
	仮怪(自然的妖怪)
実怪	物怪(物理的妖怪)
	心怪(心理的妖怪)
	真怪(超理的妖怪)
	秘怪 靈怪
	神怪
	理怪
	妙怪

⑭「物を分割して行って、究極は何かを尋ねてみても、結局はつきとめられないでいる。一方、宇宙の果てはどうなっているのか尋ねてみても、それはどのようなかわからないでいる。我々は小にしても大にしても、不可知のものが存在していて、そこを超えることができないでいる。我々はその間の人知に分かる世界において何か分かったつもりであり、世に神秘なしと知っているが、その見解は小さなことである。そういうわけで、「愚俗の妖怪は真怪にあらずして、仮怪なり。仮怪を払い去りて真怪を開き来るは、実に妖怪学の目的とする」のだ。」(『妖怪学講義』「緒言」)

⑮「天地万物これを不思議とすれば、皆妖怪なり。天台曰く、一色一香無非中道と。余曰く、一色一香無非妖怪と。人もし活眼を以て宇宙を達観し来たれば、春花も不思議なり、秋月も妖怪なり。自己の一笑一語、一挙一動に至るまで妖怪不思議ならざるなし。」(『続妖怪百談』)

「ある人、余に妖怪研究の結果を、詩句を以て示されんことを乞う。余、即ち筆

を採りて左の句を書す。「老狐幽霊非怪物、清風明月是真怪。」これ余が悟道の語なりと知るべし。」(『円了茶話』)

⑯「見よ鳥は飛び魚は泳ぎ、水は流れ雲は動くではないか。これみな無字の経、不文の教えではないか。これを一括していわば、物みな活動しているではないか。しからば吾人もまた活動すべきが当然である。しかして活動はなんによって起こるかというに、宇宙の内部に潜在せる大勢力の発動である。この勢力によって世界が循環化するに至る。しかしてその勢力の至純なるものが吾人の精神内に伝わり、わが生来固有せる先天の良心となりて、われに命令を与うるに至る。故に外に万物の活動を見、内に良心の命令に聴かば、人生の目的おのずから判明し、己の力のあらん限りを尽くして、向上活動すべきものなるを自覚するに至る。」(『奮闘哲学』)

⑰「余は従来、古今東西の哲学者の諸論もその大要だけ一通り研究し、その帰するところ人生の目的は活動に外ならぬと自得し、哲学の目的も人生を向上するに外ならぬと知るし、爾来活動主義をとりて、今日に至るものである。

活動はこれ天の理なり、勇進はこれ天の意なり、奮闘はこれ天の命なり。

これが余の主義である。すなわち吾人の天職はこの活動によりて、人生を向上せしむるにありと自信している。しかしてその向上は一身より始めて一国に及ぼし、一国より世界に及ぼすをもって順序を得たるものとし、何人も国家のために尽瘁せよと唱えている。」(同前)

⑱「哲学は物心相対の境遇より絶対の真実に論到する学とするは、哲学の向上門である。この向上門の外に更に絶対の域より相対界へ論下する一道があるが、これを仮に向下門と名付けておく。すなわち哲学の応用の方面である。……もし哲学に向上のみありて、向下なきときは、ただ学者が己の知欲を満たすまでの学となり、世道人心の上になんら益するところなきに至り、畢竟無用の長物たるを免れぬ。よって哲学には必ず向上向下の二門を併置しておかねばならぬ。すなわち向上門は哲学の理論に属する方面にして、向下門は実際に属する方面である。故にこれを理論門、実際門と称してもよい。」(同前)

⑲「……単に哲学そのものよりいえば、向上がその特性とするところにして、これに重きを置くべきものであろうも、もし更に進んでその向上はなんのためかと問わば、向下せんためなりと答えざるを得ない。すなわち向下せんための向上にして、向上門は方便、向下門は目的となるであろう。また現今にありて向上門は古来の説を反復するまでなれば、哲学の大本としては、余はすでにその理源を究め尽くせりと思う。故に余は近来もっぱら向下の一道に全力を注ぎつつある。」(同前)

⑳山はその高きをもって貴しとせず、植林の用有るをもって貴しとなす。

川はその大なるをもって貴しとせず、灌漑の用有るをもって貴しとなす。

学はその深きをもって貴しとせず、利民の用有るをもって貴しとなす。

識はその博きをもって貴しとせず、濟世の用有るをもって貴しとなす。(同前)

⑳ 「つぎに自彊不息（自らつとめてやまず）は公德と私徳とを問わず、文と武とを論ぜず、すべての事業に共通せる要素である。これを言い換えれば忍耐となる。そもそも忍の字は心が刃をいただきたる形なれば、余は心が武装しているのでありとし、戦時には身に武装をつけ、平時には心に武装をつけなければならぬ。しかしてその平時の武装は忍耐の刀である。これを心に着け、百難を排して勇進活動すべきものと思う。……」(同前)

㉑ 「井上円了は、あるとき、信州に遊んだことがあったそうで、その折り、険しい山路を上っていて、溪流の中に大きな岩石があるのを見ました。そこで円了は、このような大きな巖（いわお）は、どんな洪水でも流されまいというと、案内者は、いえ洪水のたびにだんだん上にあがっていくと答えました。円了はそんなばかなことがあるものかと思ったのですが、案内者はそのことについて次のように説明したとのことです。

「洪水のとき、激流が上のほうよりこの岩を打って来る。そのとき、大岩の底にあたっておる泥や小石は、上のほうから取り去られるゆえ、この大岩は上のほうへころりと転ずる。かような具合で、だんだん大岩は上のほうへのぼるのである。この大岩も先年までは、もっと下のほうにあったのだけれども、この前の洪水の折りにここまでのぼったのである。」

この話を聞いて、円了は次のように思ったそうです。「ほかの小石や泥は、逆流に対すればみな流されてしまうのに、大岩のみは漸次に上にのぼるといふのは、味あることではないか。男児、よろしくこの大岩のごとき確固不拔の大盤石心を持たねばならぬ。逆流に対すれば小石は流れる。逆運に対すれば常人は萎縮する。けれども大丈夫たるものは、逆境が多くなればなるほど、逆運がはげしくなればなるほど、いよいよますます奮って進まねばならぬ。」円了はこの話自体も他の人びとに話したようで、それを書にしたためてほしいとの依頼を受け、円了は、次の句を作って書いたのです。「大石は逆流にさかのぼり、大人は逆運に上る。」

## 【竹村学長プロフィール】

○竹村牧男【1948年（昭和23年）東京生まれ】

○専門分野及び研究テーマ：仏教学 宗教哲学

○所属学会：日本宗教学会 国際井上円了学会等

○略歴

1971年（昭和46年）6月 東京大学文学部卒業

1975年（昭和50年）4月 東京大学大学院印度哲学博士課程中退後  
東京大学文学部助手、文化庁宗務課専門職員、  
三重大学人文学部助教授、筑波大学助教授（哲学・  
思想学系）  
同教授を経て

2002年（平成14年）4月 東洋大学文学部教授（2013年3月まで）

2007年（平成19年）4月 東洋大学文学部長

2009年（平成21年）9月 東洋大学学長、現在に至る

2013年（平成25年）4月 東洋大学大学院文学研究科教授（2018年3月まで）

2002年（平成14年）4月 筑波大学名誉教授

○主要著書・論文

『唯識三性説の研究』、『(宗教)の核心 西田幾多郎と鈴木大拙に学ぶ』

『井上円了 その哲学・思想』、『良寛「法華讃美」』（春秋社）

『西田幾多郎と鈴木大拙』（大東出版社）、『入門 哲学としての仏教』（講談社  
現代新書）、『日本仏教 思想のあゆみ』、『親鸞と一遍』（講談社学術文庫）

『ブッディスト・エコロジー』（ノンブル社）、『日本のこころの言葉 鈴木大  
拙』（創元社）、その他多数